

成田 千空（なりた・せんくう）

1、プロフィール

北に住み北より出でず、北の俳句に生命を詠い続け、全国俳壇に青森県五所川原に成田千空ありの名をほしいままにする。権威ある俳人協会賞、蛇笏賞受賞は、地方在住俳人として希有。

<生没>

1921(大正 10)年3月 31 日 ~2007(平成 19)年 11 月 17 日

<代表作>

句集『地霊』『人日』『天門』『白光』

<青森との関わり>

青森市生まれ。青森工業学校卒。東京就職。帰郷して療養生活に入り、後北津軽に移住開墾、五所川原市に定住。

2、作家解説

「みちのくも北深く棲み一気冴ゆ」。この句は中村草田男が愛弟子千空に与えた句で、第一句集『地霊』の開巻を飾った。正に北の大地を魂とした句集である。

戦の中に始めた俳句は、戦の惨めさ、悲しさをまざまざと見ながらの吐息であった。「作品は生き続けられなければならない。この世に避けられない死といふものが存在し、抑へられない愛といふものが存在するが故に」という草田男の言葉は、千空の吐息の基礎を表明していた。そして生涯を師の言葉の中で生きるのである。

戦後「暖鳥」の創刊に加わり、青森県俳壇の中心的存在となり、青森県文化賞を受賞したが、昭和 21 年には草田男が主宰誌「萬緑」を創刊するやいち早く参加、28 年第一回萬緑賞を得た。萬緑賞は千空の為に設定されたとさえ言われ、当時の県俳壇は瞠目した。その一句一句は正に「一気冴ゆ」で、詩という短刀を胸元に突きつけられるような張りつめたものであったが、根底に流れるものは常に故郷の

北の大地であり、そこに息づくすべてのものへの愛であり、風土俳句と構えなくとも、己れ生きる処すべて自然の中、天地の愛の中という北の風土の実在感が、必然的に誘発させたものである。

昭和 58 年師草田男逝去。萬緑同人等より再三上京を勧められるが固辞し、あくまでも棲む所は五所川原、作品もこの北の大地より生み続けることを表明する。しかし、萬緑雑詠欄選者香西照雄、続いて北野民夫が師の後を追ひ、ついに在郷のままで雑詠欄選を担当することになる。63 年、有名出版社よりの出版で立派な装丁箱入りの句集でなければ賞は取れないという一般定説を覆して、青森県文芸協会出版部が出版した、箱入りでもなく装丁も簡素な句集『人日』は、選考委員満場一致で「俳人協会賞」に決定した。すべて希有な事の様ではあるが、全俳壇の千空への評価は、既に決定的に高く、内容がすべてであった。ひたすら師に作品を問い続けていた時期であったと、『人日』のあとがきにある。師の在る時も亡き後もその思いは変わらず、大地に生きる。平成 10 年、句集『白光』で県人初の蛇笏賞受賞。

3、資料紹介

○『人日』

図書

1988(昭和 63)年7月1日

195mm×135mm

第二句集。昭和 47 年から 57 年までの師中村草田男に作品を問い続けていた時期の 608 句を収録。骨太で重厚、かつ抒情味あふれる句風は千空の特徴であるがこの句集では更に自在さが加わり円熟味を増す。第 28 回俳人協会賞受賞。